

# ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (1) 施行法と反応領域・発達水準 などの記号化について

中京大学心理学部・心理学研究科 八尋華那雄<sup>注1</sup>  
中京大学心理学研究科博士後期課程 明翫 光宜

**A comparison of Kataguchi's and Exner's scoring systems for the Rorschach test: (1) Procedures and scoring symbols of location, developmental quality and Z-score**

YAHIRO, Kanao (Chukyo University school of Psychology)  
MYOGAN, Mitsunori (Graduate School of Psychology, Chukyo University)

The authors report, as the first part of a series, comparisons between 2 scoring systems for the Rorschach test - Kataguchi's and Exner's (A Comprehensive System) - that are in current use throughout Japan. This report compares test procedures, scoring symbols of locations, developmental quality and Z-score (the latter two are used only in Exner's coding system). Both systems use the same cards with different scoring methods, but even methods of conducting this test and the symbols used differ somewhat. The reasons behind those differences can be explained by the orientation of each system. Exner's method is nomothetically and corroboratively oriented, while Kataguchi's method is idiographically and clinically oriented.

**Key words:** Rorschach scoring system, Kataguchi's system, Exner's system

## はじめに

1921年、スイスの精神科医ヘルマン・ロールシャッハ (Hermann Rorschach, 1884-1922) によって著書「Psychodiagnostik (精神診断学)」とともに刊行された10枚のインクプロット図版が、今日投影法の代表とされるロールシャッハ・テスト (以下、ロ・テスト) である。この小論では、ロ・テスト反応の整理・解釈法として、わが国で1950年代初頭からKlopfer法に準拠して確立された体系で、使用者の78.7% (小川, 2000, p142-151) と最も広く用いられてきた片口法 (修正Klopfer法, 片口-Klopfer法) のスコアリング・システムと、1970年代から世界的規模で用いられるようになり、最近特に若い心理臨床家に親和性の高い包括システム (以下Exner法) のコーディング・システムを比較し示すことで、一方から他方へのスコアリングの変換を容易にすることを目的とした。最近、ロ・テ

スの事例指導を行っていても、学んできたシステムが違うためお互いに違和感や戸惑いをおぼえることがあったからである。両方のシステムに通じていることにより、建設的な議論が展開できるのではないかと期待できる。尚、筆者らの内、八尋は片口法に、明翫はExner法に普段は準拠している。

## 片口とエクスナーの基本的考え方

両システムの違いを理解するには、基本的に両者がロ・テストをどのような課題と見なしているかを捉えておくことから始める必要がある。

エクスナー (Exner, 1986, p20, 28) は、極端に言えばロ・テストを投影法とは考えていない。「ロ・テストは投影法として考案されたのではなく、また使用され始めてから20年間は、投影法として発展したのでもない。—中略—1940年代初期の投影法の運動において、ロ・テストが重要なテストと呼ばれるようになった……」, 「このテストは、被検者の心理的な多くの働きを引き起こす方法である。テ

注1 kyahiro@lets.chukyo-u.ac.jp

トの実施中に投影の過程がしばしば生じることは疑いがなく、簡単に投影技法というレッテルを付すのは誤っている。このテストは投影技法以上のものであり……、刺激が複雑な心理的特徴を活動させる様子が一層明確になってきた」と述べている。

ロールシャッハは、「この実験は無作為の形すなわち不定形の図像を解釈させるものである。……解釈は、直接的には空想力の働きとなんに関係もなく、むしろ知覚と統覚の概念に属する」(Rorschach 1921, 鈴木訳 1998, p15, 17) と述べている。ロールシャッハの考えをエクスナーは、まとめると次のように述べている。「このテストはインクプロットと記憶痕跡の適合を要求する課題としており、記憶痕跡と刺激図によって生じた感覚の統合により、反応は形成される。この統合あるいは刺激感覚を存在している記憶痕跡に一致させようとする努力が意識的になされる働きである。反応の形成に無意識の要素が影響することを否定し、想像力も基本的過程とは関係がなく、想像力は反応の修飾にのみ現れる」(Exner, p33-34)。「エクスナーは、ロールシャッハのこの考え方を踏襲し、ロールシャッハ法を課題解決作業とみなした」(藤岡, 2004, p10)。そして、このようなスタンスの基、1950年代から60年代にかけて、診断の正確さや信頼性や妥当性に疑問を投げかけられたことに対して、実証的で臨床に役立つシステムを1936年から1957年に展開を遂げていた5つのシステム(Beck, Hertz, Klopfer, Piotrowski, Rapaport & Schafer)を包括したシステムをエクスナーは提唱した。

片口(1987, p158)は、ロ・テストがどのような課題であるかを、エクスナーのように明記してはいないが、「このテストはあいまいな状況の下で、あいまいな図形を被検者に示し、反応を求める検査である」とし、「刺激にも場面にも規定性がない自由な状況下で、被検者のその人らしい主体的・自発的な関わり方が示されるから診断的意義が生じる」と考えている。そして、反応の決定には以下の要因が関与していると述べている(p157-161)。一つは、図形の持っているある程度のあいまいさと一定の形に見られ易い形態的特性である。漠然とした図形刺激は、被検者の過去経験・関心・不安・情緒・価値観・欲求などの諸因子が知覚の選択性に関与しながら、もっとも個性的な仕方で表現するきっかけを与える。他にも、検査場面の受け取り方、受検態度、検査者と被検者の関係も反応に影響すると述べている。

ロールシャッハ反応は一種の投射(影)反応で、人格や行動のなんらかの側面を反映しているが、抑圧の機制を前提としない同化投射(assimilative projection)と無意識的防衛である抑圧投射(repressive projection)の二つの投射があると言う。全体反応の数と質に投射される物事の処理にあたっての総合的判断・高度の知的水準・優れた注意力や完全癖などの諸特徴は日常的・習慣的な生活における特徴的行動様式がプロットの把握・処理に際して反映されたもので、これが同化投射である。それらの特徴は指摘されれば自覚し受容しうるものである。一方の抑圧投射は、何らかの理由で衝動が抑圧され、その抑圧された概念がプロットに投射されたと説明できる場合である。いかなる意味においても、自覚し受容し得ないような特性を投射反応に示す場合、そこには抑圧投射の機制が働いていると考える。

また、片口は、「投射法における最も重要な点は、被験者から得られた主観的反応を、客観化することにある」(片口, 初版の序 p iii)として、Klopfer法を基礎としたスコアリング・システムに準拠し、スコアリングを中心とした形式分析を解釈の基本とすることを強調しながらも、システムをよりスリムにし続け、「私は、ロ・テストの底に流れる、柔軟で人間味ある科学的精神を大切にしたい」、「ロ・テストは、秩序ある自由、あるいは自由の中の秩序といった、真にリベラルなあり方を前提として、はじめて成り立つ検査であるように思われる」(片口, 初版の序 p ii)と継列分析やヒューマンスティックな観点をも大事にすることを薦めている。一言で言えば、片口法は反応の処理の自由度が大きいシステムと言える。さて、このような基本的な違いを念頭に、次に施行法・教示・整理法など順次両法の異同を、片口(1987)、Exner(高橋ら監訳 1991)、藤岡(2004)を基にまとめていくことにする。

## 施行法

表 1 片口法と Exner 法における施行法の異同

	片 口	Exner
座り方	向かい合って座る ・被検者の緊張を和らげる位置を考慮して並んで座ることも可。 ・検査中の被検者の行動を観察するのに都合が良い。 ・被検者が言及する blot の特徴を観察出来る。	横に並ぶ(あるいは、90度の位置に座る) ・検査者の非言語的行動が被検者に影響する可能性が弱まる
導 入	強制的でない自由な雰囲気を作る 「これからあなたに 10 枚の……」 カードを手渡す	「では、インクプロット・テストを始めましょう。(カードを手渡ししながら) これは何でしょうか」 (カードを手に持たせる) 検査前面接で査定の目的・方法の概要を伝える。
反応数	I カードに 1 個の場合、複数の反応を求める声かけをする。 「他にありませんか」 他の質問には概ね「あなたの好きなように」と答える。	「もう少し時間をかけて見ると、他にも見えると思います」 TR は 14 以上を求める。 1 カードから 5 つ以上の反応がある場合は介入 (5 つ以下ならばその後の介入はしない)
拒否・失敗	「もう少しばかり見ていて下さい」 約 1 分。強制的ではなく、「他に何か見えませんか」	「時間をかけて下さい。急ぐことはありません」 拒否に固執するなら、「どれだけ時間を使ってもよい」と圧力をかけることも。
追加・取り消し	反応の追加・取消しは認める	追加された反応は一応説明を聞くが、coding しない。取り消されそうな反応も、思い出して説明するように求める。
時間の制限	与えない。1 枚のカードに最大限 5 分程度。3 分位までは干渉を避ける。	ない。特に TR ≤ 14 には十分に時間をかけてもより多くの反応を出すように求める。
時間の計測	各カード初発反応時間と終了時間を計測する。	計測しない。
質問段階	非指示的でなければならない。 誘導的暗示的であってはならない。 ・「それはどこに見えたのですか」 ・「○○だと思ったのはなぜですか」 ・「もう少し詳しく説明して下さい」	誘導的であったりコード化と無関係な質問は駄目。簡潔で間接的質問でなければならない。 ・「私にも見えるように手伝えて下さい」 ・「あなたが見えているのがどこか私には判りません」 ・「その何からそのように見えたのか、私には判りません」
限界吟味段階	反応数の少ない場合や興味ある反応内容の場合に有効。	直接的質問や一対比較の形式による質問を用い漠然とした反応を明確にしても良いが、コード化はしない。
記 録	被検者の全ての反応は原則として記録しておく。	全ての反応は逐語的に記録しなければならない。

### 施行法の差異について

施行法で両法にいくつかの差異が見られる。その主なものは以下の点である。

**座り方**：片口法は対面で施行することが多いが、テスト場面では緊張を和らげることが大事で、対面に固執しなくてもよいとされる。対象が幼い子の場合、脇に座ることも薦めている。一方、Exner 法は、ロールシャッハ原法と同じく、横に並ぶ座り

方を推奨している。「被検者に影響しそうな検査者の不注意で不必要な手掛かりの影響を減らすため」(Exner, p76) だと言う。対面と横並びの違いはあるが、両法ともにその座り方が被検者の行動を観察するのに良いとしている。藤岡 (p26) は、面接も検査も「どのような関係性を志向しているか」によって相手との位置を変化させるが、検査は横並びがよく、筆者 (明翫) が用いる 90 度の位置も可としている。筆者 (八尋) は、面接をしているクライエン

トにロ・テストを自ら施行することが殆どだが、テーブルを挟んでの対面式からクライアントの横に座るのは、対人距離があまりに近く変わり過ぎはしないかと懸念する。

**反応の数：**Klopper 法の教示は、「ロールシャッハが用いた教示と本質的には同じで、包括システムでも採用されている」(Exner, p38) と言うから、両法で大きな違いはないが、Exner 法は、徹底した統計研究に裏づけされた数量的分析を特徴としているので、構造一覧表からの解釈に耐える反応量として、TR が 14 以上を求める。その量がないと、十分な再検査信頼性が得られないのである。14 未満の場合は、質問(疑)段階に進まず、再検査を行う。Rej/Fail を認めないし、質問段階で出現した反応(片口では追加反応)は反応としない。反応の取消しに際しても思い出そう求める。

しかし、片口法では、最初の教示の中と I カードの第一反応の後に複数の回答もあり得ることを示し、反応数は被検者にまかされている。質問段階で自発的に出てきた反応もスコアし解釈に含める。筆者(八尋)はかつて、片口自身が「全てのカードが拒否されたとしても、その人の特徴を描くことが出来る」と述べたのを聞いた事がある。

**時間の計測：**ロールシャッハは時間の計測を行わなかったが、抑うつ被検者は答えるのに時間がかかり、素早く反応する被検者は知覚や観念が支離滅裂であろうと示唆したことから時間計測への注意が促された。時間は、ショック即ち刺激の困難さや複雑さの指標としても用いられてきた。片口法では、初発反応時間、各カードの終了時間、更には反応と反応の間がひどく空いた場合など各々の時間を計測して記入する。しかし、Exner 法では、計測が早く反応することを促したりすること、また刺激のスクリーンには僅かな時間しか要せず、反応の遅れは、判断や決定、言語的修飾の過程によるもので、そうした過程は反応自体にも表されるとして計時しないメリットが大きい(藤岡, p21)と考えている。つまり、時間の計測によって得られる情報は、反応の質を吟味することで補えるから計測は不要だと言うのであろう。筆者(八尋)は、反応の質だけではなく、情報処理の早さ・正確さ、精神テンポ、継列分析での反応の象徴的意味の理解などに時間の情報が役立つと考えている。

**質問段階：**Exner 法では、コーディングを正確に行うことが必須の条件であるから、被検者の見方

や見たものを検査者も追体験することが大事となる。それゆえに、質疑は厳しい印象を与える。例えば、質問段階で「何が○○のように見えたのか判りません」「よく判らないのですが」と言った質疑をする。ニュアンスとして、「あなたの言っていることが判らない」と否定的にも聞こえる。

片口法では、被検者の発言に対して「検査者が疑わしげな、あるいは非受容的な態度で応ずれば、消極的・防衛的構えをとりかねない」(p34)と戒めている。特に質問段階での両法のこのような違いは、ロ・テストを用いる目的にあるように思える。エクスマーが、実証的心理測定法としてのみロ・テストを位置づけているのに対し、片口は、ロ・テストの本来の目的は心理診断・人格診断にあるが、心理療法に関連したロ・テスト研究を通覧すると、検査自体の治療効果も考慮した方がよい(片口 p360)としたように、また秋谷(1984, p9)が、「検査者-被検者という二人の人間のロールシャッハ図版を挟んでのやりとりは、治療者-患者という二人の人間の面接におけるやりとりと同義であり、ロ・テストは構造化された面接法である」と主張するように、片口法は査定だけに止まらない観点を持っている。



## 整理法 (スコアリング/コーディング)

### 反応領域 (Location)

表 2 反応領域分類の異同

	片口	Exner	備 考
全体反応	W	W	(片・Ex) blot 全体を反応に用いる
切断全体反応	W	[D/Dd]	(片) 自ら不要な部分を cut し、全体の 2/3 以上の blot を使用 (Ex) 指定された部分だと D, 以外は Dd となる
作話的全体 (結合) 反応	DW	[W]	(片) blot の一部を捉え、以外の部分が概念とマッチしてなくても、全体に般化した反応 (Ex) 全体を用いたと言った場合は W, 明細化なしの場合や、不適合の場合は FQ がーとなる
部分反応 普通大部分 普通小部分	D d	D/Dd [D/Dd]	(片・Ex) blot を他の領域から容易に切り離すことができ、比較的頻繁に用いられる部分。 両法共、領域と番号が指定されている。 (片) blot の大小により、D と d が分けられる。 (Ex) Dd は W と D 以外の領域を用いた場合
特殊部分反応 微小部分 外縁 内部 特殊区分	dd de di dr		(片) 用いられた blot が W, D, d, S 以外の部分。blot の選択により 4 つに分類される (Ex) シンボルとしてはない。多くの場合 Dd で出現頻度が 5% 以下の領域となる
空白反応	S	S	(片・Ex) 図 (blot) と地 (space) が逆転して浮かび上がってきた反応である (片) S 領域単独と blot 領域との組み合わせの二通りのスコアリングがある (Ex) 単独の S 反応はなく、他の領域を伴って WS, DS, DdS とコードされる。

注：[ ] 内はスコアやシンボルとしてはないが、記号化するとすれば……という例。(片) は片口法、(Ex) は Exner 法

### 反応領域分類 (Location) の差異について

片口法の領域カテゴリーは細かくは 10 種類で、blot と space など複数の領域が用いられた場合は、中心概念や用いられている blot の大きさなどを手掛かりに、主領域と副領域を決め、カンマで繋いで W, S とか S, D などと表記する。S が単独で主領域にもなる。片口法で Dd と表記するのは特殊部分反応の総称である。

一方、Exner 法では領域カテゴリーは Beck 法に準じて 4 種類で、S は単独でコード化されることはなく、S の用いられる頻度によって領域図に DS5 などと決められており、領域図にない頻度の少ないものは DdS99 とコード化される。それ故、片口法の W や特殊部分反応の多くは Dd99 とされる。Exner 法のカテゴリーは非常に簡単明瞭で、実証的所見に基づいているので、独断や基準の曖昧さがないのが特徴と言える。

両法共、W を除いて、その blot の用いられる頻度が重視される。片口法では、D や d が頻度の高い部分領域で、普通部分と呼ばれる。Exner 法には d がなく、それらは D とされることが多い。

また、W 反応について、片口法では、「基本的に blot を全体として把握しようとする態度に基づく反応」(p48) であれば、意味付けされない部分があっても、自発的にその部分が除外されないと (不完全な) W となるが、Exner 法では、実際に用いられた領域がコード化の対象となる。

このような違いは、解釈仮説とも関連しているように思える。片口は、反応領域のカテゴリーは、被検者の外界把握の様式あるいは与えられた課題の処理様式を反映するとしている。この分類の情報から「総合的か、分析的か、演繹的か、帰納的か、抽象的か、具体的かなどの知的様式を、またこれらの諸因子から、完全癖の有無、成熟度、知的水準などの人格特性を知ることが可能」(片口, p167) である

としている。一方エクスナーは、領域は知覚刺激の  
入力や認知のスタイルを示すもので、「どのように  
環境に接近するのか、特に対処行動の形態という側  
面についての手掛かりを与えてくれる」(Exner,  
p423) と言う。

W に関して片口は、知的な側面と関係しており、  
優れた W を多く示す人は理想家肌の知的な人柄で、  
総合的・抽象的なもの見方に関心を示すとしてい  
る (p173)。しかし、ロールシャッハ自身も言及し  
ている W と知的操作との関連には、肯定・否定の  
報告がある。エクスナーは、「W は刺激野全体を処  
理しようとする動機の指標と見なしてよいが、洗練  
され複雑な認知的操作との関係は発達水準 (DQ)  
による検討」(p424) をして明確な関係が判るとし  
ている。更には、刺激野を組織化する努力と関連す  
る Zf (Z スコアの付いた反応数)、組織化する努力  
の質である DQ, 刺激を処理する際の効率を表す  
Zd (Zsum-Zest), W : M, W : D をも視野に入れ  
る必要があると述べている。即ち、エクスナーは  
blot の大きさや頻度だけではなく、当てはめられ  
た概念の質や他のスコアとの関係も考慮しなければ  
刺激の対処・処理のあり方は理解できないと主張し  
ているのである。

頻度高く用いられる部分反応は、的確であれば  
「物事を現実的・具体的に処理していく能力」(片口,

p173) や「課題を効果的・経済的に遂行する志向」  
(Exner, p425) と結び付けられている。Dd は、片  
口法では、社会的・常識的な思考の枠に囚われない  
自由で活発な精神活動を反映していたり、完全癖に  
より細部に拘泥する傾向と理解されている。Exner  
法では、Dd 反応は平均範囲内であれば肯定的なサ  
インだが、多さは環境への特異な、強迫的接近だけ  
ではなく、S の多さも考慮すると回避であったりす  
るとされる。Dd が正確さを追求するものであれば、  
完全主義や曖昧さを許容する普通の対処ができない  
傾向を示すとしている。blot のどこを用いるか、  
そこに当てはめられた概念は何か、blot との適合  
性はどうかと言った事に関しては、次項の発達水準  
と結合性 (Z スコア) でも触れることにする。

### 発達水準の評定と組織化活動 (Z スコア)

発達水準 (DQ: Developmental Quality) と Z  
スコアは、認知過程における明細化と組織化を評定  
しようとするものである。DQ と Z は、片口法のス  
コアリング・システムにはない。しかし、この二つ  
が示す概念は片口 (p112) が「形態水準の評価に  
際して、与えられた反応の正確さ、明細化、結合性  
を総合的に評価する」ところに組み込まれている。  
片口法の基礎となっている Klopfer 法の形態水準

表 3 発達水準 (Developmental Quality: DQ) の評定

	片口	Exner	
統合反応	なし	+	[プラス] 複数の概念が一つの反応の中に織り込まれている。その概念に DQ <sub>o</sub> が含まれている。
普通反応	なし	o	[オー] 形態を持った概念が反応内容である。形態半確定の概念であっても、形態についての言及・明細化がある。
漠然反応	なし	v	[ヴェイグ] 形態半確定・形態不確定の概念。あるいは、形態への言及がない場合。
漠然統合反応	なし	v/+	[ヴェイグプラス] 複数の概念が一つの反応の中に織り込まれている。しかし、その全てが DQ <sub>v</sub> の場合

表 4 Z スコアの評定 (Exner 法のみ)

blot 全体の組織化	ZW	DQ が +, o, v/+ の W 反応 (DQ <sub>v</sub> は Z スコアの対象外)
近接した部分の組織化	ZA	複数の接した blot を、関係付け統合している反応
近接しない部分の組織化	ZD	複数の離れた blot を、関係付け統合している反応。
空白と blot との組織化	ZS	空白部分 (space) と blot とを関係付け結合している反応。

注: Z をスコアする反応は必ず形態が含まれていなければならない。

形態不確定概念にスコアすることはない。

評定の手掛かりである正確さとは、概念に一般的に認められる形態特徴と blot の形態が適合していることを、部分を指摘しながら(明細化)対応させた場合を言う。その概念がどの程度確定した形態特徴を持つかによって、形態確定的概念、形態半確定的概念、形態不確定的概念の3つにクロッパーは分けた(Klopfer, 1954, p207-210)。Exner 法の DQ のうち o は確定的概念、v は半確定と不確定概念に相当する。DQ+ は、複数の概念が関係付けられて見られ、DQo を含んでいるものである。DQv/+ は複数の概念が用いられているが、全て DQv の場合である。即ち、+とv/+は複数の概念が結合して用いられた場合にスコアされる。この結合反応は Z スコアとしても評価対象となる。不確定概念の W を除く W は、全て Z であり、隣接した部分の結合も Z だし、離れた部分の Z もありうるし、空白を統合するのも Z である。「Z スコアは、反応が意味のあるように組織化されている場合に付ける得点であり、各図版の各組織化の型ごとに、ベックの業績にもとづいて、重みづけられた得点がエクスナーによって決められている」(藤岡, p45)。またエクスナーは、ウイルソンとブレイク (Wilson & Blake, 1950, p20-24) の追試から、Z の総数 (Zf) から推定される Z スコアの総和 (Zest) と実際の Z スコアの総和 (ZSum) の差を組織化の効率 (Zd) として求め、その差が ±3.0 を超える場合、刺激の走査や処理が過度に几帳面で慎重な傾向や軽率で不注意であることを示唆するとした。

## ペア反応 (Pair Response (2))

(2) というスコア (シンボル) を Exner 法では用いる。これは blot の対称性によって、ペアになっていると認知された時にスコアされる。ペア反応については決定因の項で取り上げるが、前述の Z スコアとも関係するのでここでも少し触れることにする。ペアはその二つの概念の間に関係性が言及された場合のみ Z スコアの対象となる。ただ単に、「右と左にある」とか「二人」と言った場合にはスコアされない。

## 考察

ロ・テストのスコアリング・システムで今日わが国を二分している片口法と Exner 法の比較のうち、施行法と領域に関する部分を記述してきた。Exner

法は片口法の基礎となっている Klopfer 法を内包しているから、もちろん両法には共通した部分もある。共通しているスコアで触れなかったものは、例えば反応した際のカードの方向の記号化がある。この指標については両法とも詳しい記述は殆どないが、カードを与えられたままに見て rotation しないとか、全体でしか反応しないと言った特徴には、辻 (1997, p28) が指摘するように、「被検者が状況に拘束され易い、状況によりかかり易い傾向を反映している」という被検者と外界との関わり方を示す重要な情報がある。カードの向きは両法とも記録するのだから、この情報から得られる人格特徴にはもっと目を向けるべきではなからうか。

上述したように、同じテストでありながら、両法は施行法の段階から幾つかの差異が見られる。大きく異なるのは座る位置、求める反応数、時間の計測で、また若干の違いが質疑の仕方にある。整理法のうち、Exner 法では領域のスコアで、W, DW, d がなく、特殊部分の dd, de, di もなく、S の扱いに差異がある。また、blot の処理に関連して、片口法にはない発達水準の分類や組織化活動の評定 (Z スコア)、ペア反応の記号化が Exner 法には見られる。この差は、Exner 法が nomothetic で実証的診断を志向しているのに対し、片口法が idiographic で臨床的理解を志向していることから生じていると思われる。

Exner 法が既存の5つのシステムを包括しながら、危ぶまれていたロ・テストの信頼性・妥当性の確立を重視し、数量的な検討を加えることを続けて提示されたことは良く知られており、科学的態度として十分に評価されるべきことである。施行法にしる Location の分類にしる膨大なプロトコルの分析の結果決定されており、それらはロールシャッハ研究財団の設立 (1968 年) 以降蓄積してきたものを基にしている。ただ、よく訓練された検査者が収集したプロトコルであることには問題は少ないかもしれないが、対象は「患者でない成人と児童」とか「統合失調症を含む精神科入院患者」と言った群分けがなされている (Exner, p27, p39-64)。果たして、さまざまな特徴や能力を持つ個々人を均一のグループであるかのように扱ってよいものであろうか。

片口法も客観的であることを重視し、sign approach による形式分析の重要性を強調しているが、カードが持つ特性に対する対処を考慮しながら、意味付けを力動的に把握しようとする継列分析も大事

にしている。また、プロトコルの言語的表現を吟味することも片口法の特徴と言える。これは、「個別的・臨床的アプローチを重視するクロッパーの流れ」(藤岡, p4) を汲んでいるからとも言える。片口法はある意味自由度が大きいし、Exner法のような鍵変数に基づく解釈戦略をいった枠組みにも乏しい。

Exner法の実証的心理診断を是とするか、片口法の自由度のあるアプローチを是とするかは、検査者のロ・テストの使用目的や人間観や臨床観によるであろう。第二報では、反応決定因の記号化と形態水準評定について検討する予定である。

#### 文 献

- 秋谷たつ子 1984 ロールシャッハ・テストと心理療法との関連 ロールシャッハ研究 XXVI p9 金子書房
- Exner, J. E. Jr. 1986 The Rorschach: A Comprehensive System Vol. 1: Basic Foundation 現代ロールシャッハ・テスト体系(上・下) 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 金剛出版 1991 p20, p27, p28, p33-34, p38, p39-64, p76, p423, p 425
- 藤岡淳子 2004 包括システムによるロールシャッハ臨床 誠信書房 p4, p10, p21, p26, p45
- 片口安史 1987 改訂 新・心理診断法 金子書房 初版の序 p ii iii, p34, p48, p112, p157-161, p167, p173, p360
- Klopfer B. 1954 Developments in the Rorschach Technique chapter 8 Form-Level Rating p207-210
- 小川俊樹 2000 ロールシャッハ法(エクスナー法) 氏原寛・成田善弘編 臨床心理学② 診断と見立て [心理アセスメント] p142-151
- Rorschach, H. 1921 Psychodiagnostik 新・完訳精神診断学 鈴木陸夫訳 1998 pp15-17
- 辻 悟 1997 ロールシャッハ検査法 金子書房 p28
- Wilson, G., and Blake, R 1950 A methodological problem in Beck's organizational concept. Journal of Consulting Psychology, 14 p20-24
- (受理年月日 2004年9月14日)